

委託事業実施内容報告書

平成24年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 公益財団法人浜松国際交流協会

1. 事業名称 浜松版日本語コミュニケーション能力評価システム策定事業

2. 事業の目的

浜松市は、2010年1月に浜松市外国人学習支援センターを開設し、在住外国人の日本語学習支援の充実を図っている。現在、浜松国際交流協会は、同センターにおいて日常生活での日本語コミュニケーション場面を設定し、場面に即した会話を引き出す活動を中心とした日本語教室を委託運営している。外国人受講者の国籍、性別、年齢、職業は多岐にわたり、日本語を学ぶ目的や求める日本語口頭能力も実に多様である。学習者が自ら日本語学習を継続したいと思える動機付けのために、また修了後の社会参加促進のために、外国人・日本人どちらの目からも見える日本語能力評価システムを策定し、多文化共生社会構築を目指す。

3. 事業内容の概要

浜松市外国人学習支援センターで開催されている日本語教室(初級レベル0~3)で、それぞれのレベルにおいて口頭能力の基準を測る。平成23年度文化庁委託事業で研修を受けPDCA型日本語教室運営ノウハウを得た日本語教師らが、今年度は日本語能力評価に特化した研修を受け、「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価についてを参考にしながら、試行・実践・分析を行い、能力評価の策定を行う。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成24年 7月2日 15:00 ~ 16:30	1.5時間	浜松市多 文化共生 センター	石岡 修 嶋田和子 白井えり子 柳澤好昭 吉山則幸 藤田健次 内山 夕輝 河口 美緒	事業目的・ 計画につい て	・文化庁の指針は一つの方向性を示すものである。きちんと読み解いた結果、見える化を進めるのは悪いことではない。 ・企業もコミュニケーションを重要視している。 ・現状の日本語教室では、1つの基準に向かっていているというより、目の前の学習者に合わせている。軸になるものが作れば

				鈴木由美恵		<p>目標は定まっていくのではないか。評価があることで、企業・地域・外国人・日本語支援者に役立つものができるのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で限界を決めてしまっている第2世代の若者たちに可能性に気付かせられるようなスケールを作りたい。 ・見える化された評価で、日本語教室の効果が見える化されることも期待している。それは、日本人社会にも外国人学習者にもインパクトがあると思う。 ・測定と評価は違う。 ・企業においては、評価する側の基準で評価される。基準の作り方は難しいが、その基準によって学習者や教える側が伸びる方向に行けば良いと思う。 ・これから始まる研修に関して、評価基準に特化した研修はまだないので、面白い取り組みである。
2	平成 24 年 9 月 10 日 14:00 ~ 15:30	1.5 時 間	浜松市多 文化共生 センター	小林悦夫 嶋田和子 白井えり子 柳澤好昭 吉山則幸 藤田健次 内山夕輝 河口美緒 鈴木由美恵	研修報告 今後の予定 懸案事項	<ul style="list-style-type: none"> ・評価が学習者にとって学習目標となればよいが、その人の不利になってしまうことには注意が必要。 ・一般的に評価するには、まず基準を作り、それを測るための簡便で汎用性のあるテスト方法を開発する。次にテストを訓練する。学習者にこういう力をつけたいという目的をはっきり示すことが必要。 ・教授方法を改善していくことにもつなげる必要がある。 ・評価項目の内容が重要である。 ・評価には汎用性と個別性があるが、その人の何を見たいのかまだ明確に伝わっていない。何のために評価基準を策定しているのか？ ・学習者にはものさしや次のステップを踏むための指標として、企業には評価として活用してほしい。浜松でこの評価がスタンダードになるようにしていきたい。

					<ul style="list-style-type: none"> ・生活者としての外国人の日本語の特徴として、話す聞くと読み書きの能力にかい離があるが、それが教室で顕著である。この読み書きの判定をどうしたら良いか。 ・11月23日に中間発表を行いたい。
3	平成 24 年 12 月 17 日 14:30 ~ 16:00	1.5 時 間	浜松市多 文化共生 センター	石岡修 小林悦夫 嶋田和子 白井えり子 柳澤好昭 吉山則幸 松葉優子 松本三知代 藤田健次 内山夕輝 河口美緒 鈴木由美恵	進捗状況報 告 <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションと正確性とあるが、正確性とは何を示しているのか？文法の正確性なのか？ ・何のための正確性か？コミュニケーションがとれれば、文法にこだわる必要はないのでは。 ・生活者に対する日本語学習支援を始めた時は、対応力を重視していた。しかし、リーマンショック以降日本にとどまり根付くということ考えた時、今のコミュニケーション力では、地域の活動に主体的に入っていくのは難しいという場面を見てきた。そこを上げていくには文法が必要かとも思うが盛り込み方がわからない。 ・企業では、コミュニケーション能力と理解力を重要視していて、その点を評価の対象にしていた。 ・企業で調査をしていた時は、挨拶、繰り返し、確認、あいづちの4つが必ず出てきていた。これらができるかできないかは大きいのでは。 ・正確さを情報量と表現するのはどうか。 ・コミュニケーションを測るならやり取りがあり方がよいのでは？ ・タスクテストは行った事があるが有意義だった。汎用的なタスクを設定しないといけない。 ・授業シラバスとテストシラバスは違う。 ・来年度は、普及検討委員会を立ち上げたい。市内の NPO や企業と連携していきたい。

4	平成 25 年 3 月 15 日 11:00 ~ 12:30	1.5 時 間	浜松市外 国人学習 支援セン ター	小林悦夫 嶋田和子 白井えり子 柳澤好昭 吉山則幸 松葉優子 松本三知代 藤田健次 内山夕輝 河口美緒 鈴木由美恵	進捗状況報 告	<ul style="list-style-type: none"> ・評価者の中に、日本語教員の資格を有する者とあるがもう少し具体的に表記した方がよいのでは。 ・評価の観点の中に、学校のお便りを読んで欲しいと持参する学習者も少なくないがあるが、持参してくれるのはむしろ信頼関係がある証拠。ネガティブに捉えない方がよいのでは。 ・今後の課題の中に、テストの趣旨説明が足りず学習者に不安を与えたとあるが、具体的にどうしたことだったのか説明してほしい。 ・文字テストは多人数でやってもよいのではないか。 ・相手を思いやるという文言を婉曲表現が使えるにしたら？具体的にしたら？ ・課題を細かく報告した方がよい。 ・タスクテストの構成の中で、職場での円滑なコミュニケーションのためとあるが、タスクの中にもっとコミュニケーションが入った方がよいのでは。 ・短い期間でよくここまで形にできた。今後は、課題をきちんと精査し振り返る事で、次のステップへとつなげてほしい。
---	---	------------	----------------------------	---	------------	---



5. 日本語教室の設置・運営

※日本語教室の設置・運営は浜松市から委託事業を受けて実施中。

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称

日本語学習支援者のための日本語コミュニケーション能力評価システム策定研修

(2) 目的・目標

「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価についての取りまとめを検討し、浜松に即した日本語コミュニケーション能力評価システムを策定する研修を行う。

(3) 対象者

2年以上の日本語教室活動経験者(平成23年度文化庁委託事業 PDCA型サイクルでの日本語教室運営研修受講者が望ましい)

(4) 開催時間数(回数) 28.5時間 (全19回)

(5) 使用した教材・リソース

「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価について
 AJALT 日本語研究誌 第 5 号
 中国帰国者定着促進センター 紀要第十二号
 企業内日本語教室カリキュラム開発 報告書
 JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック
 みんなの Can-do サイト
 サーティファイコミュニケーション能力認定委員会 コミュニケーション検定
 目指せ、日本語教師力アップ！ OPI でいきいき授業
 シリーズ多言語・多文化協働実践研究 13 共生社会に向けた協働の地域づくり

(6) 受講者の総数 15 人

(出身・国籍別内訳 日本 15 人)

(7) 受講者の募集方法

HICE NEWS、HICE ホームページ、チラシの配布(別紙参照)

(8) 養成・研修の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名
1	平成 24 年 7 月 28 日 9:00～ 12:30	3 時 間	浜松 市多 文化 共生 センタ ー	13 人	RHQ 支援セン ターでの日本 語評価基準を 学ぶ	大和定住促進センターや 国際救援センター、RHQ 支 援センターで 30 年余に渡り 行われてきた難民への日 本語教育プログラムを学 び、日本語評価基準策定 に活かす	内藤 真知子氏 (公益社団法人国際 日本語普及協会専 務理事)
2	平成 24 年 7 月 28 日 13:30～ 17:00	3 時 間	浜松 市多 文化 共生 センタ ー	11 人	中国帰国者定 着促進センタ ーでの日本語 評価基準を学 ぶ	中国帰国者定着促進セン ターで開発された中国帰国 者コミュニケーション水準 及び判定テストの内容、活 用方法等、具体例を交えて 学ぶ	小川 珠子氏 (中国帰国者定着促 進センター教務部教 務第 2 係長)
3	平成 24 年 8 月 11 日 9:00～ 12:30	3 時 間	浜松 市多 文化 共生 センタ ー	13 人	企業内日本語 教室からコミュ ニケーション 能力を考える	企業内日本語教室活動か ら、働く上でのコミュニケー ションに必要な能力とは何 かを考える。	山屋宏氏 (県立浜松城北工業 高校・企業派遣講 師) 柳澤好昭氏 (明海大学教授)

4	平成24年 8月11日 13:30～ 17:00	3時間	浜松市多文化共生センター	13人	企業における人事考課から能力判定を考える	企業における職務遂行能力と日本語能力について、その開発の経緯や活用方法について学ぶ	柳澤好昭氏 (明海大学教授)
5	平成24年 8月25日 9:00～ 12:30	3時間	浜松市多文化共生センター	15人	OPIの見地から日本語能力判定を考える	浜松市外国人学習支援センターにおいて、学習者の口頭能力を判定するにあたり参考にしているOPI。OPIの見地から日本語能力判定を考える。	嶋田和子氏 (一般社団法人アクラス日本語教育研究所代表理事)
6	平成24年 9月1日 9:00～ 12:30	3時間	浜松市多文化共生センター	15人	多文化社会型居場所感尺度から能力判定を考える	多文化社会型居場所感尺度の結果を踏まえながら、日本語教室の在り方や、能力評価の活用方法について学ぶ。	石塚昌保氏 (四谷ゆいクリニック臨床心理士)
7	平成24年 9月27日 10:00～ 13:00	3時間	浜松市多文化共生センター	7人	実践研修	「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価についての活用方法を考える	嶋田和子氏 (一般社団法人アクラス日本語教育研究所代表理事)
8	平成24年 10月6日 9:00～ 12:00	3時間	浜松市多文化共生センター	9人	実践研修	浜松版日本語コミュニケーション能力評価の基準について	柳澤好昭氏 (明海大学教授)
9	平成25年 1月31日 10:30～ 13:30	3時間	浜松市多文化共生センター	7人	実践研修	浜松版日本語コミュニケーション能力評価基準の具体化について	嶋田和子氏 (一般社団法人アクラス日本語教育研究所代表理事)

10	平成25年 3月15日 15:20～ 16:50	1.5時間	浜松市外国人学習支援センター	11人	実践研修	浜松版日本語コミュニケーション能力評価基準の教室活動への活用について	嶋田和子氏 (一般社団法人アクラス日本語教育研究所代表理事)
----	-----------------------------------	-------	----------------	-----	------	------------------------------------	-----------------------------------

(9) 特徴的な授業風景

地域における日本語教室で必要とされる日本語能力評価基準を開発するために、既に活用されている評価基準やシステムを学ぶ研修を行った。評価の実際を試してみるワークショップも取り入れながら、何を測定し評価したいのか学ぶ機会とした。





(10) 目標の達成状況・成果

講座研修後には、講義の概要と内容及び感想をレポートで提出してもらった。それをまとめたもの(別紙参照)を、受講者のメーリングリストで共有し、一つの評価基準に対し多様な感想・考え方があることを学んでもらった。受講生らは、様々な評価基準を学ぶ事で、自身のこれまでの活動内容や日本語教室の在り方そのものにまで振り返る機会となった。

(11) 改善点について

開発の前にまずは様々な評価基準を学び、その後ワーキンググループにおいて会議を繰り返しながら、講師に実践研修をしていただく予定だったが、評価基準の開発やシステム策定の手順が初めてだったので、形を作ることに非常に時間がかかってしまった。実践研修を行う場合は、もっと頻回に講師に指導を仰げるよう体制を整えたい。

7. 日本語教育のための学習教材の作成

- | | |
|-------------|----------------------|
| (1) 教材名称 | 浜松版日本語コミュニケーション能力テスト |
| (2) 対象 | 生活者としての外国人 |
| (3) 目的・目標 | 別紙報告書参照 |
| (4) 構成 | 別紙報告書参照 |
| (5) 使い方 | 別紙報告書参照 |
| (6) 具体的な活用例 | 別紙報告書参照 |
| (7) 成果物の添付 | 別紙報告書参照 |

<http://www.hi-hice.jp/aboutus/publication.html>

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

浜松市は、2010年1月に浜松市外国人学習支援センターを開設し、在住外国人の日本語学習支援の充実を図っている。現在、浜松国際交流協会は、同センターにおいて日常生活での日本語コミュニケーション場を設定し、場面に即した会話を引き出す活動を中心とした日本語教室を委託運営している。外国人受講者の国籍、性別、年齢、職業は多岐にわたり、日本語を学ぶ目的や求める日本語口頭能力も実に多様である。学習者が自ら日本語学習を継続したいと思える動機付けのために、また修了後の社会参加促進のために、外国人・日本人どちらの目からも見える日本語能力評価システムを策定し、多文化共生社会構築を目指す。

(2) 目標の達成状況・事業の成果

研修においては、様々な評価基準を学ぶという知識の導入を意識して行った。それぞれの目的に沿って評価基準が作られている事を学んだことは、受講者が何のために日本語を指導しているのかということを見つめ直すきっかけにもなった。また、受講者には、講師が紹介した評価基準について内容や感想をレポート提出してもらい、それらをまとめたものを受講者間のメーリングリストで共有したことにより、互いの日本語支援への思いの違いを実感する機会にもなった。

日本語教育のための学習教材の作成においては、ワーキンググループを作り、評価基準や評価方法を検討し作成する作業を行ったが、この作業により、客観的に日本語教室を見直し、評価が指導に大いに活かせる事を学べた。また、ワーキンググループを「主婦・主夫グループ」「就労者・求職者グループ」と分けたことにより、背景が多様な生活者に対し、ある程度の絞って議論を深める事ができた。同じ立場の教師らが、学習者の何を評価したいのかを考えた事で、自分のポリシーを再確認することができた。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

浜松の場合、来日間もない外国人というより、在住歴は長いが日本語をきちんと学習する機会がなかった外国人の方が多数であり、彼らは日本語を使わないで、もしくは日本語をなんとなく使いながら生活者として根付き始めている。生活をするためには、働く、家庭を支える、子育てをする等は日常の行為である。標準的なカリキュラム案には、ぜひ「働く」「子育て」という生活上の行為の事例に対応する学習項目の要素を掲載していただきたい。

例えば、ロールプレイで職場において休みを願い出るシナリオを作る際に、標準的なカリキュラム案の「やりとりの例」と「語彙」を参考にしようとしたのだが、休暇を口頭で願い出るという行為は、職場において必要とされる行為と分類されており、掲載されていない。休みを願い出る事は、日本語教室や保護者会等を休む時にも応用がきく場面であり、地域においては働く、子育て分野の学習項目の要素が非常に活用されると思う。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

研修では、地域で活動している日本語教師らが集まったことから、互いの教室での取り組みや目的等を話す機会となり、横のつながりを意識する契機となった。

また、ワーキンググループメンバーには、それぞれ様々な活動場所で日本語指導や支援を行っ

ている教師らが集まったため、多様な背景を持つ学習者の日本語能力について情報交換ができ、議論を深める事ができた。

(5) 改善点, 今後の課題について

評価基準を策定するのは初めての作業だったので、何から手をつけて良いか戸惑うことが多かった。決められた期間内で形を作ることはできたが、整えるには時間が足りなかった。今後は、テストを実際に試しながらさらに精度を高めていきたい。

また、評価を、学習者、支援者に適切にフィードバックする方法についても検討し、効果的な日本語教育プログラムの開発にも活用していきたい。また、評価結果を分析することによって課題をあぶりだし、日本語教育普及への理解を促進するとともに、日本語教育環境整備に努めたい。